

○井上えり子* 水島かな江** (*神戸学院女子高、**神戸松蔭女学院短大)

目的 単身者世帯が増加しつつある現在、家事に関する知識と技能を習得することは個人にとって重要な課題である。しかし家事がどのような方法で次世代に伝えられるのかは、十分に検討されてはいない。本研究ではおもに中年女性を対象として、家庭科教育で取り上げられているような基礎的な家事の知識と技能がどのようにして伝承されているのかを検討する。

方法 1996年7月上旬～9月上旬および12月中旬に、神戸市内の女子高校生と女子短大生261人の母親、祖母、おばを対象として、質問紙に基づく生徒によるインタビュー調査を行った。回収率は88.1%、有効票は230であった。おもな調査内容は衣食住保育に関する基本的な家事19項目であり、各々について「母親から教わった」、「学校で学んだ」など、どのようにして習得したかをたずねた。加えて「よく作る料理」や「衣服の購入方法」などについて、どのようなことに留意し、どう学んだかを自由記述で調査した。

結果 家事の種類によって次のような伝承のパターンがあった。主として①母親、②母親と本・雑誌・説明書、③母親と学校、④母親と病院、⑤本・雑誌・説明書である。各パターンの具体的な内容は以下のとおりである。①は「お米のとぎ方」など基本的な調理、②は「親子どんぶり」などの調理、③は「ボタンつけ」などの基礎的な裁縫、④は「おむつの替え方」などの育児、⑤は「洗濯機の使い方」や「幼児服の作り方」などである。